収蔵文書紹介40

# 中田益雄家文書

上都賀郡西方町大字本郷の中田益雄氏から二〇五九点の文書が寄託されていて、すでに『栃木県史料所在目録第十一集』として刊行されていますが、その中から特徴的なもの二、三を紹介します。

西方地区は、江戸時代には西方郷十三か村と呼ばれていて、中田家はその内の下宿村にありました。下宿村は旗本堀家と本多家が約一八〇石ずつ等分に支配しており、中田家は堀家の名主を代々勤めています。寄託文書の中で最も古い年代の文書は寛文二年（一六六二）の下宿村『古水帳写』ですが、安永十年（一七八一）の写しで、大部分は江戸時代中期以降のものです。年貢割付状、田畑皆済目録、宗門人別改帳、五人組帳など基本的な文書が多数存在しますが、いずれも堀家知行分のみのものなので注意が必要です。また、幕末から明治初期の御用留、日誌、晴雨家業日誌などの記録書が代々書き残されていて、この文書群の特色の一つになっています。その中には、慶応四年の都賀郡一帯に起った打ち壊しについて、名主中田作右衛門の『御用留帳』には「多人数押寄行所々家作へ火ヲ掛土蔵打破」り当村に迫りつつあるとして下宿村の逼迫した状況を地頭役所へ急報しています。一方倅栄三郎は『晴雨家業日記帳』四月十一日の条に「打毀一条ニ付荷物始末」とあわただしい様子を記載しています。

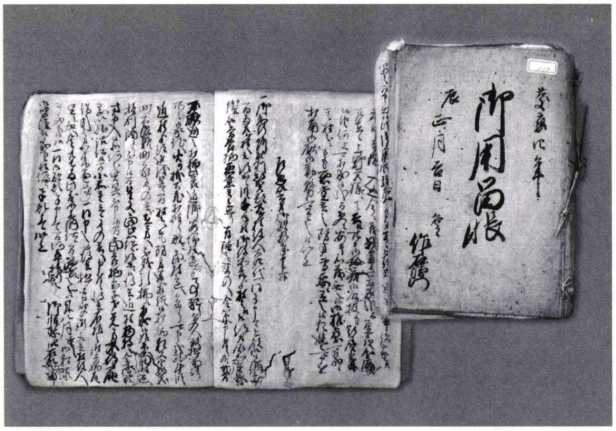

写真1.　世直し騒動を伝える御用留帳

西方郷は小倉川から農業用水を引いて水田耕作をしていますが、この堰の管理や用水権をめぐってしばしば紛争が起こり、『慶安以降小倉川関係訴訟事件記録』などその関係の記録も多数残っており、また嘉永六年（一八五三）アメリカのペリーが軍艦四隻を率いて浦賀に来航したため、海防の費用を農村にまで割り振られたことを示す下宿村『去ル丑浦賀内海異国船到来ニ付御軍役御用金割合帳』など珍しい文書もあります。

明治八年西方郷の下宿村など十か村は「耕地宅地悉皆互交星散いたし村界難相立」として県に『村宿合併御届書』を提出し、翌九年金崎村を除く九か村のうち新宿村などが本城村、古宿村などが元村、下宿村などが本郷村になり、現在の西方町の骨格ができあがりました。

中田家文書で特筆されるのは、第一回栃木県会日誌の第一号が保存されていたことです。栃木県会は明治十二年四月十四日に初めて開会されましたが、そのことを記録した県会日誌が見つからず「幻の日誌」ともささやかれていました。

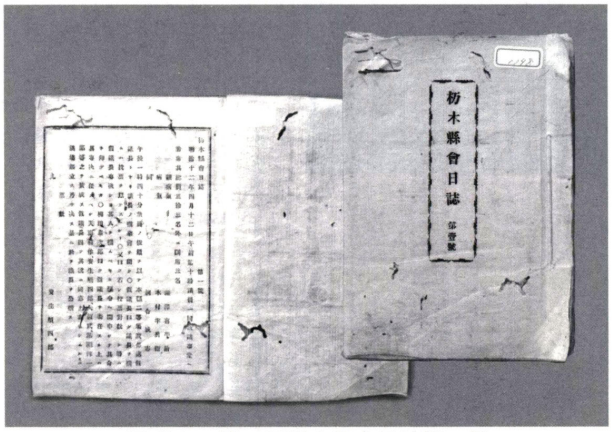

写真2.　第一回栃木県会日誌第一号

中田家に残されていた日誌は、まさにその第一号で、この発見によって、記念すべき開会前後の様子が判明したのです。それによれば、開会は四月十四日ですが、二日前の十二日に栃木町の仮議事堂に議員が招集され、まず正副議長を選出した後、議席番号を確定し、続いて地区幹事を互選して院の構成を整えた上で、十四日に開会となった様子が確認できたのです。時の当主である中田栄三郎は県会議員ではありませんが、地区の有力者としてこの日誌を入手出来る立場にあったのでしょう。この直後の七月には本郷村戸長、続いて村会議員に就任しています。

（仲田凱男）

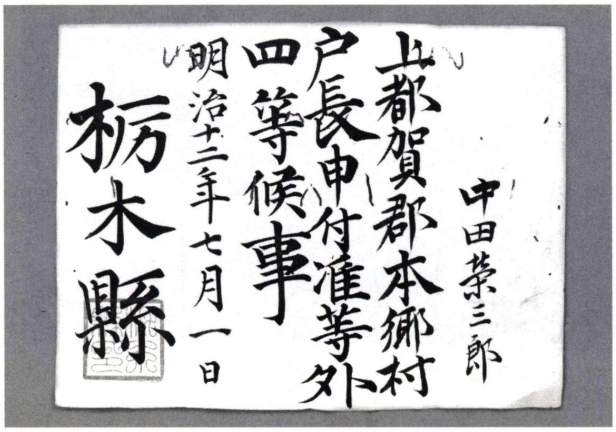


写真3.　本郷村戸長辞令